

第19回

# 心に残る医療

私の体験記コンクール 入選作品集

主催：日本医師会 / 読売新聞社

後援：厚生労働省

協賛：アメリカンファミリー生命保険会社

協力：暮らしの手帖社



- |                     |                               |                                  |                |                   |                    |                   |                           |                   |                       |                    |                |                      |                          |
|---------------------|-------------------------------|----------------------------------|----------------|-------------------|--------------------|-------------------|---------------------------|-------------------|-----------------------|--------------------|----------------|----------------------|--------------------------|
| 審査委員・評論家<br>上坂 冬子 様 | 審査委員・医事評論家<br>水野 肇 様          | 審査委員・<br>日本精神病院協会名誉会長<br>齋藤 茂太 様 | 佳作<br>落合 三枝子 様 | 佳作<br>佐藤 宜子 様     | 佳作<br>黒田 幸雄 様      | 佳作<br>藤井 美弥子 様    | 佳作<br>中田 ひさえ 様            | 佳作<br>和辻 麗子 様     | 佳作<br>長坂 かの子 様        | 佳作<br>湯浅 信次郎 様     | 佳作<br>池田 早希子 様 | 日本医師会常任理事<br>山田 統正 様 | 読売新聞社執行役員事業局長<br>矢後 勝洋 様 |
| 日本医師会副会長<br>石川 高明 様 | アメリカンファミリー生命保険会 社長<br>大竹 美喜 様 | 厚生労働省・大臣官房技術総括審議官<br>下田 智久 様     | 特別賞<br>田村 匡史 様 | 読売新聞社賞<br>江間 美紀 様 | 厚生労働大臣賞<br>大島 澄江 様 | 日本医師会賞<br>長尾 直子 様 | アメリカンファミリー介護賞<br>土屋 たづ子 様 | 日本医師会長<br>坪井 栄孝 様 | 読売新聞社専務取締役<br>堀川 吉則 様 | 日本医師会副会長<br>小泉 明 様 |                |                      |                          |

表彰式の模様..... 1 ~ 7

入選作品紹介

厚生労働大臣賞..... 8、9

日本医師会賞.....10、11

読売新聞社賞.....12、13

アメリカンファミリー介護賞.....14、15

特別賞.....16、17

佳作.....18 ~ 27

読売新聞記事

主な募集告知.....28

表彰式の模様.....29

入賞者発表.....30 ~ 31

入賞者・上位5編発表.....32 ~ 33

コンクールの経過報告.....34

審査委員一覧、応募規定.....35

応募作品内訳.....36



ポスター

## 主催者挨拶

日本医師会長 坪井 栄孝



「心に残る医療」私の体験記コンクールは、今回で十九回目を迎え、私も日本医師会は読売新聞社とともに主催者として席につかせていただいております。年々、盛況になり、今回も二、二五八編の応募がございました。これらを読んで選び出すという仕事は大変なお仕事だと思いますが、齋藤先生、水野先生、上坂先生方の大変な努力でこれを選考いただきまして、本日、佳作を含めて十五編の体験記を表彰させていただくわけでございます。

「ご参列の受賞者の皆様方、またそのご家族の皆様方のお喜びに對し、心からお祝い申し上げたいと思います。ただ、この応募作品は、心が晴れやかになるものよりもむしろ、大変だった体験記が多いわけです。それを拜見するにつけ、我々医師が皆様方の心の中に入り込む部分がいかに少ないかを痛感すると同時に、昨年も申し上げましたが、我々がもともと勉強しなければならぬということ、強く感じさせられます。

私も日本医師会の賞として選ばせていただきました作品は、大げさに言うと、今日、あいさつを、声をつもらせず、できるかなと思っただけ、私にとっては痛切に心に響いた体験記でございます。

す。長尾さんがお子さんのことを書いた手記ですが、すでに全文をお読みいただいた方もいらっしゃるから詳しくは申し上げませんが、私も体験的に、この唯佳ちゃんが先生と電話した後で「うん、わかった」と言ったその口調が、そのまま音となって再現できるわけでございます。どうして神様はこんな小さい子どもにこういう訓練を与えるのかというような体験記で、それをお母さんである長尾さんがしっかりとらえてお書きいただいております、日本医師会がこれを選ばせていただけるのは、大変な光栄であると思っております。

その電話で何をお話しになったのかわからないとお母さんも書いていますが、「うん、わかった」と唯佳ちゃんに言わせたその先生が、いかに我々の同志として、同輩としてすぐれた医師であるか、そして、この形こそ日本の医師、いわゆるかかりつけ医の原形であるというふうには、私には思わずにいられません。そこで、ぜひ、長尾さんには、このお医者さんにも、この賞のお裾分けをしてやっていただきたい。まだ見たこともお会いしたこともない先生ですが、私がこの先生に對して、「心から、先生、ありがとう」と言っていた」とお伝えいただきたいと思っております。

多少、感傷的なお祝いの言葉になり、申しわけございませんが、そのほかの賞をいただいた方の文章もすべて、この体験記を我々医師の道しるべとしていかなければいけないものばかりです。昨年は入賞作品をまとめた小冊子をすべての日本医師会員の先生方の目にとまるように配布させていただきましたが、今後もこれを続けていきたいと思っております。

受賞されました皆様方からお祝いを申し上げますとともに、いろいろお世話になりました関係各位にも、この場で感謝の念を表わしておきたいと思っております。まともい祝辞になりましたが、心からの祝辞と御礼を込めて「あいさつ」といたします。

## 主催者挨拶

読売新聞社専務取締役 堀川 吉則



受賞者の皆様にお祝い申し上げます。また、お寒い中ご出席いただきましてご来賓の皆様方にも、心から御礼申し上げます。

今年の受賞作品は、全国から応募されました二、二五八編の作品の中から三次にわたる厳正な審査の結果選ばれたものでございます。本日の読売新聞朝刊に、二ページにわたって上位五作品が掲載されております。お読みになった方もいらっしゃると思いますが、いずれも執筆された方ご自身、もしくはご家族の闘病、介護等々の体験が大変感動的につづられております。

私も皆様の作品を何点か読ませていただきましたが、お医者さんや看護婦さんの人柄、介護する人のさりげない心配りに励まされたという作品が多かったように思います。「読売新聞社賞」を受賞された及川しのぶさんの「家族の時間」というタイトルの作品は、結婚されてわずか一カ月でご主人が入院され、その後生まれた乳飲み子を連れて、毎日病院までの遠い道のりを電車で通われたという内容

でした。奥さんご本人がもちろぬ一番大変なわけですが、お子さんも生まれたばかりで、相当な負担になったことでしょう。病院では、ほかの患者さんに迷惑をかけないかなど、いろいろな心配、気遣いもあったことと思いますが、及川さんの場合は、看護婦さんたちが、ご主人の生きる希望であるお子さんがご主人のそばに、いられるようにしてくれ、家族のようにつき合ってくれたという作品でございます。

どんなに元気に見える人間でも、一生のうち、何回か病院のお世話になると思います。私事で恐縮ですが、去年の後半、私も生まれ初めて初めて一カ月ばかり入院いたしました。そこで初めて、お医者さんに本格的に体を診ていただきましたが、実際、一日中ベッドに横たわっていると、医療関係者、特に看護婦さんとのふれあいがある、ほっとするというのが非常に大事で、私も、ほのかな触れ合いで、ほっとするということを体験することができました。

本コンクールを通じて、よりよい医療、介護環境の構築のお手伝いを、主催者の一人として今後もやっていきたいと思っております。

我が読売新聞社では、このコンクールのほかに、へき地など、医療環境が大変厳しい中で命を守るために地道な活動をなさっておられるお医者さんや看護婦さんを表彰する「医療功労賞」という事業も行っております。また、読売新聞の紙面では、長期連載の「医療ルネッサンス」に加えて、昨年からは社会福祉、社会保障といったものを主に取り上げる「安心の設計」という紙面もスタートさせました。今後とも、このような姿勢を貫いていく方針でございますので、ご愛読をお願いしたいと思います。

最後になりましたが、多くの作品を審査していただきました審査委員の先生方、共同主催の日本医師会、ご後援いただきました厚生労働省、ご協賛をいただきましたアメリカンファミリー生命保険会社、ご協力いただきました暮しの手帖社の皆様方に厚く御礼を申し上げます。ごあいさつにかえさせていただきます。どうもありがとうございました。

## 祝辞

厚生労働大臣 坂口 力

(代読) 厚生労働省大臣官房技術総括審議官 下田智久



第十九回「心に残る医療」私の体験記コンクール表彰式に当たり、一言お祝いの言葉を述べさせていただきます。

初めに、栄えある表彰を受けられました皆様方に心からお慶びを申し上げます。

今回のコンクールでは、全国から二、三、五八編もの作品が寄せられ、そのうち「医療」をテーマにした作品が一、六八七篇、「介護」をテーマにした作品が五七一篇であったと伺っております。

改めて、国民の医療や介護に対する関心の高さを痛感した次第です。

私も、いくつもの作品を拝見させていただきましたが、いずれも患者さんやその御家族の体験に基づいた生の声に満ちており、一つ一つの作品の持つ内容の重みに強い感銘を受けるとともに、医療や介護の担い手と受け手の信頼関係の大切さを強く印象付けられました。

今回、厚生労働大臣賞を受賞されました栃木県の大島澄江さんの作品は、曾祖父の介護に日々を費やす曾祖母の労を労いたいという気持ちから、試行錯誤ながらも、一生懸命に行った曾祖父のお世話。これを通して、曾祖父との絆がより一層強まり、また、人の世話をすることに喜びを見出し、将来、看護婦になることを決意したというお話です。

現在、医師や看護婦などの医療関係職にとっては、患者さんとのコミュニケーションを深め、患者さんの心を理解することが、とりわけ重要な課題となっております。

このような中、曾祖父との心のふれあいを知った人の命の尊さから将来、看護婦になろうと心に決め、勉学に励む姿には、心温まるものを感じました。将来、りっぱな看護婦さんになることを期待致します。

また、介護特別賞を受賞された岡山県の土屋たづ子さんの作品は、四十四歳の若さで脳内出血を患い、意識不明となった夫の在宅看護を通して、介護の難しさを学ぶとともに、医師や看護婦の熱心な指導の下、介護のやりがいを見出したというお話です。

このような、貴重な介護の体験談を今後の行政に生かしていければと感じました。

これからも、このコンクールにおける体験記を始めとして、国民の皆様方が医療や介護の現場で感じになった声をできるだけ聞かせていただき、これを厚生労働行政に反映させ、国民の皆様方に、より良い医療や介護が提供され、全ての国民が安心して生活を送ることができるよう努めていきたいと考えております。

最後になりましたが、このコンクールのためご尽力いただきました日本医師会、読売新聞社およびアメリカンファミリー生命保険会社の皆様方に対しまして、深く敬意を表しますとともに、ここにお集まりの皆様方の今後のより一層のご健勝とご活躍を祈念いたしまして私のご挨拶いたします。

## 祝辞

アメリカンファミリー生命保険会社社長 大竹 美喜



第十九回「心に残る医療」私の体験記コンクールにおいて、ご入賞されました皆様には心よりお祝い申し上げます。

私もアメリカンファミリー生命保険会社が、この「心に残る医療」に協賛させていただくようになり、今年で九回目をむかえることとなりました。昨年までは、広く医療の分野の作品の中から「アメリカンファミリー賞」という名称で、優秀な作品を選ばせていただいておりますが、本年より、「アメリカンファミリー介護賞」という名称に改め、特に介護分野から優秀な作品を選ばせていただくことになりました。

我が国では、65歳以上の高齢者が全人口の20%を超える「超高齢社会」が目前に迫る中、昨年の公的介護保険の開始によって、「介護」に対する関心・意識が急速に高まっています。こうした中、介護の分野にも焦点を当て、病床にある方々やそのご家族の声を広くご紹介し、21世紀の介護環境の向上にわずかなりとも寄与したい、というのが私どもの願いであります。

さて、今回、「アメリカンファミリー介護賞」を受賞されました、

岡山県の土屋たづ子さんの作品ですが、私は大変深く感動いたしました。

土屋たづ子さんの作品は、ご主人の在宅介護における、介護・医療スタッフとの連携、さらにはご主人との心の交流を生き生きと感動的に表現されております。土屋さんのご主人は、高齢が原因ではなく要介護状態になられたのですが、土屋さんの作品は、多くの病床にある方々やそのご家族に大きな勇気を与える作品だと思えます。ご主人が44歳にして脳内出血で倒られ、最初は絶望の淵に立たれたことであろうと推察いたしますが、その、意識が戻られないご主人との生活の中にも安らぎを見いだされ、長年のご夫婦の夢であった本も制作、出版されました。周囲の医療従事者への感謝も忘れず、前向きに生きていらつしやる土屋さんの姿勢には学ぶべき所が非常に多いと思います。栄えある第一回目の「アメリカンファミリー介護賞」を土屋さんが受賞されたことを、私も大変うれしく思っております。

土屋さんご夫婦の共著「熱帯の植物を訪ねて」フィリピンへの旅の記録」を拝見いたしました。ご夫婦は同じ大学の同じ先生の門下生、同じ植物学の専攻と伺いました。そして、ご主人の幹夫さんが在外研究のためフィリピンに滞在されていたとき、ご夫婦は、印象に残る植物に出会う度にそれらを写真にとり、その植物にまつわるエピソード等をまとめ、お仲間とともにその謎解きを楽しんでいらつしやうです。その集大成がこの本です。お二人の植物への関心もさることながら、人間愛に満ちたそのお人柄こそがこの本を刊行する原動力となったのだと思います。

昨今、世の中には、医療・介護を取り巻く難しい問題が山積しているのは事実です。そういつた問題を、一つひとつ解決していかなくてはならないことはもちろんのことですが、ここで決して忘れてはならないのは、医療・介護の基本は何と言っても、患者・家族・医療従事者の三者の心のふれあい・信頼関係なのではないのかということです。「心のかよった医療・介護であってほしい」これを私は切に願っております。

入賞者の皆様、本日は誠にありがとうございました。

# 表彰式と記念パーティー

平成13年3月2日  
於：東京・帝国ホテル「牡丹の間」(表彰式)  
「桜の間」(パーティー)



表彰式会場で花束を手にして着席する受賞者の皆さん



表彰式で審査講評を述べる審査委員・医事評論家の水野肇氏



読売新聞社・矢後勝洋執行役員事業局長から賞状を受け取る佳作の田村匡史さん



審査委員・齋藤茂太日本精神病院協会名誉会長による乾杯



パーティー会場での受賞者の皆さんと審査委員の齋藤、水野両氏(前列中央)



作品にも出てくる娘の千春ちゃんと宴席を楽しむ読売新聞社賞の及川しのぶさん

# 表彰式・審査講評

## 審査講評

審査委員・医事評論家

水野 肇



私は、このコンクールの第一回から審査員を務めさせていただいてありますが、率直に言わせて、皆さんの文章がうまくなつたという感じが、私の偽らざる心境であります。ただし、一言だけ苦言を言わせてもらいますと、回を重ねるほどに、だんだん入選作にできるだけ似せてくるという傾向を感じます。自分の体験の書き方を似せてこられるのは結構なのですが、体験そのものを似せているのではないかと思われるものがたまにあります。今回も高点を取った作品の中に、「こんなことがほんとうにあるのか」と、思われるものがあり、フィクションだと具合が悪いので読売新聞社に調べてもらいましたところ、やはりフィクションだったことがわかり、ご辞退いただいたということがありました。

私は、そういうことは非常に問題なのではないかと思えます。これは、フィクションのコンクールではありません。芥川賞や直木賞とは違って、これは、心に残る私の体験を書くコンクールなので、私が体験していないことを書くのはルール違反なわけです。そういうことを、この辺で一度申し上げておかなければいけないのかなという気がいたします。

また、体験記の書き方として、もしも皆様には何かアドバイスするならば、事実は一生涯懸命に書いてくださるのですが、それについて自分がどう感じたか、どういふふうにご感動したか、あるいはその医

者に対してどういふ気持ちになつたかということをもつ少し書いた方がいいのではないかとことです。そのところを書き込めば、入賞するチャンスはどんどん増えるのではないかと思います。

それから、これは齋藤先生もよくおっしゃるのですが、誤字脱字がまだ多い。皆さん方は専門家ではないから、誤字脱字がある程度あるのはやむを得ないという意見もあるかもしれませんが、率直に言わせてもらいますと、それにしても多いと思えます。少なくとも文章を書くときには、よく齋藤先生がおっしゃるように、必ず目の前に国語辞典を置いて書いてほしいと思つてます。

それから、これは私の主観かもしれませんが、ワープロで打つておられるの方が字の間違ひが多いという印象を持っております。このことをあまり言いませんが、今、日本の新聞記者は皆ワープロを使っていますから困られるかもわかりません。私は、何もワープロが悪いと言っているわけではありません。仮名を漢字に変換するとき、それが正しいかどうか分からないのに変換することから問題なのです。たとえワープロを使つても、書き進むうちに、分からない字があつたら字引を引くほうがよいのではないかと私は思います。ワープロは文明の利器ですから、上手に利用すればいいのです。例えば、私もいろいろいる仕事で、外資系の製薬会社にいる外人と話をしていますと、びっくりするぐらい日本語を上手にしゃべるのに、実は一字も日本語が読めないという人がいます。もちろん、読売新聞は読めないし、字は一字も書けないわけでは、このように漢字というものは難しいものから、文章を書く以上は、字引を引かながら書くというふうな努力をしてみたいと思います。

最後に一言。慣れてきますと、原稿用紙を見たらサーツと書けるようになる人はたくさんいらっしゃるわけですが、皆様方の場合はそうではないわけですから、お書きになるときは、自分は何を書きたいのかをちょっとメモをしてみ、それから書くというくせをつけて書けば、私はもっとまとまったものになるのではないかと思います。皆様は、年々テクニックに長じてきていると言え、私も少しは心にかけていたほうがいいが、よりよい作品がいついふうくるであろうと思つて、これからの人生を送られる場合にも、そういう物の見方が大変役に立つのではないかと思います。

そんなことが私の審査講評でございます。皆さん、おめでとございませう。

厚生労働大臣賞

「桜の木に  
誓ったこと」



大島 澄江

(16歳)

栃木県大田原市・高校生

四月、桜の花が咲き誇る季節になる度、私は思い出すことがあります。曾祖父を介護した思い出、葬儀の時に私がした一大決心の事です。

七年ほど前、曾祖父は周りの反対を押し切って、曾祖母と共にアパート暮らしを始めました。当時、曾祖父の年齢は八十代後半でした。しかし、曾祖父はバイクに乗って出掛けたり、広告の裏いつぱいに文字を書いたり、とにかく元気で

した。突然家を出た曾祖父たちの考えの中にはおそろしく、周囲に迷惑を掛けたくない、自立してみたいと思いがあつたのではないかと思えます。それでも何かと心配で、私たち家族は週一回程度足を運びました。曾祖父たちは玄關から私たちの顔が見えると、「よく来たな」と言っ出て迎えてくれました。私は、何となく気持ちが悪く、曾祖父たちのアパートで休日を通りかかっている方が好きでした。

元氣だった曾祖父も九十歳を迎えたころには、やはり年には勝てなかつたのが介護の手を必要とするようになってしまいました。私は、日々曾祖父の介護をして疲れているだろう曾祖母を少しでも手伝いたいと思い、簡単な料理を作ったり曾祖父の介護をしに行くようになりました。このころ、曾祖父が自分で出来た事といえは、食事を取ったり、多少ではあるけれど歩行したりと、最低限の事でした。

私は、座いすに座っている事の多かつ

た曾祖父の体位をちよくちよく変えてあげました。この時に気を使った事は、力のかけ具合でした。また、布団に横になっている時に「水」と言われると、ストローを用いて水を飲ませたりしました。

この時、むせてしまったことがあり、どうしたらむせずに飲んでもらえるかと、試しに私も曾祖父と同じ状態で水を飲んでみました。すると、一気に水が入ってきてやっぱり私もむせてしまいました。そこで、体を横にしてみたり、ストローを細いものに変えたり、まくらを用いて頭部を高くしたりしました。

いろいろ考えた方法を曾祖父に試したところ、まくらを使った方法が一番むせずに飲めるということだったので、それからはそうやって飲ませるようにしました。曾祖父は私が介護する度に、「すまないな。ありがとう」と声を掛けてくれました。

私は曾祖父を介護するにあたって、まず相手の立場になって、一番いい方法を見いだすことを第一に考えました。そし

て、一方的に介護するのではなく、あくまでも曾祖父の自立を支える事を念頭に置きながら介護をしました。

しばらくたって、曾祖父と曾祖母は私の家に泊まりにきました。その夜、曾祖父は腹が痛いと言え、父は慌てて車で病院まで連れて行きました。

曾祖父が病院からアパートへ戻った翌日、突然曾祖父は私と父に、「なあ、ばあさんと一緒に写ってる写真を撮ってくれないか」と言い出しました。しかし、曾祖母は照れたのか、「後で撮ってもらうべ、なあじいちゃん」と言っ撮らうとはしませんでした。その時の曾祖父は、不満そうな表情でした。

しばらくして曾祖父は父に、「桜が見たいんだけど、あんた家の近くにあつたら、とってきてくれないか」とポツリと言いました。私と父は車に乗り、探しに出掛けることにしました。確かに私の家の近くに桜の木がありました。しかし、つぼみがのぞいている程度だったの

らみのある梅の木を見つけ、枝を折ってアパートに持って帰りました。理由を曾祖父に説明すると、「いいよ。ありがと。テレビの上の花瓶にでもさして置いてくれ」と言っ、ずっと一点を見つめていました。

その何日か後に曾祖父は亡くなりました。

曾祖母が曾祖父に夕飯を何にするか尋ねたところ、何の返答もなく、眠るように息を引き取っていたそうです。曾祖父の葬儀には、とても大勢の人々が来ました。

私はこの時、もつともつと曾祖父を大切にしなければ良かった、あの時、曾祖母との写真を撮ってあげれば良かった、梅の枝だけでなく桜の枝も持っていたらあげれば……。様々な後悔の思いや、曾祖父と過ごした思い出などが脳裏をよぎり、涙がこぼれました。そして、参列した大勢の人を前にして、人間は多くの人に支えられて生きていることを痛感しました。

火葬場には何本もの桜の木が枝いっぱいに花をつけ、満開に咲き誇っていました。おそろしく曾祖父は、満開の桜を見て旅立ったとてしよ。そして私は、桜の木に看護婦になることを誓ったのです。



厚生労働省・下田大臣官房技術総括審議官から賞状を受け取る大島さん(右)

日本医師会賞

「祈りの時を  
 共に過すこと」



長尾 直子  
 (42歳)  
 神戸市・主婦

一九九九年(平成十一年)十二月、娘(十歳)は、ターミナル(終末医療)の入り口に立ったことを宣告されました。腹部にできた悪性奇形腫で二年半、闘病した後でした。それから、七月に亡くなるまで七か月の間、本人と家族の希望どおり在宅療養を続ける事ができました。

娘は主治医の先生とよく気が合い、ま

るで友達同士のように接していました。廊下で見かけると飛びつかんばかりに走り寄り、ふざけてたいたりポケットの中をいじったり、いたずらばかりしていました。先生も負けずにやり返します。私たち親には、時には歯にきぬを着せずズバツと話をされる先生でしたが、その中にいつも温かいものを感じていました。

「カゼか。ノド赤いんか」と言いながら、大きな懐中電灯を持ってきたり、どちらがスキーが上手か必死になっていばり合ったりするちゃめつ気がたっぷりなところもある先生でした。

そんな先生も、ターミナルに入ってから、娘のいない所で、つらそうに元気なく話す事がだんだん増えてきました。そんなたくさんの思い出の中で、一回の電話を私は忘れることができません。

一回目は、四月の終わり。この少し前から先生の携帯電話に緊急で連絡する事ができていた状態でした。朝、機嫌よく寝転がってビデオを見ていた娘が、急に「息が苦しい。胸が苦しい。おなかが

痛い」と、エビのように体を曲げています。先生は出張で神戸を離れていましたが、すぐ連絡しました。そして、モルヒネの座薬の量を指示してもらって様子を見ました。

でも、まだ苦しそうで三十分してまた電話をしました。車を運転中の先生は、どこかに車を寄せてから、もう一回指示をくれましたが、混乱している私は娘の様子をつまぐまとして話せません。先生は、落ち着いた声で「お母さん、ゆいちゃん電話口に出れるかな」と聞きました。私は思わず、そんな無理な、と思いました。とにかく娘に尋ねると、「うん、話す」と言つので、抱えるようにして電話口に座らせました。私は泣いているのを娘に見られないよう、後ろから娘を支えています。

「うん、うん、わかる」。娘は何度もうなずいていて、気がつくとも口調もしつかりしてきています。

「先生がね、空气中に酸素があつてそれを吸い込みにくい感じ？って聞いたから、そうじゃなくておなかの方からおな

かが張って苦しい感じって言ったよ。それしたら、もう一回座薬がんばって静かに寝ときつて」。娘は私よりずっと落ち着いた顔で横になってくれました。

一回目は、それから二か月ほどたった、もう足がむくんでどたんどたんはれてきたころでした。娘は自分の足を見て、「また元に戻るん？ もっとむくんだらどうするん？ どうなるん？ かあかん(私のこと)は、こんなになってないからわからへん」と泣きながら訴えます。

私はただただ足をさすりながら、「いめん、いめん。わかるねんけど、どうにもできんでほんとに「いめん」と言つしかりませんでした。

人生の中に修羅場というのがあるのなら、ああ今まさにそうだ。そう思いながら涙が止まりませんでした。娘は、「先生に聞く」と言い出しました。先生とは、できるだけ事前に打ち合わせをしてから娘に対応してもらっていたので、一瞬迷いましたが、もう仕方ありません。先生は、手の空くのを待って五分ほどしてかけ直してきてくれました。「うん、うん

わかった」。娘はまた、長く先生と話しています。受話器を置くと、体の中の血液の流れの事を、娘なりに詳しく説明してくれました。先生は、「今一番しんどいんやけどなあ。辛抱できるか。辛抱しいな」と言ってくれたようにでした。私は一瞬、拍子抜けしてしまいました。でもこれ以上ほかにどんな事が先生に言えたらでしょう。

娘は、もつ泣いていませんでした。ちっちゃな声で、「かあかん、さつきはいめんね」と言ってくれました。

一回とも、先生とどんな事を話したのか、もう二度と娘の口から聞くことはできません。でも娘の心の中には先生をしっかりと信頼している気持ちがあったからこそ、こうやってぎりぎりまで先生に助けを求め、先生もそれに誠心誠意こたえてくれたんだと私は信じています。

在宅での看護はまだまだ試行錯誤の現状だと思えます。先生や看護婦さんたちとは何度も話し合い、その度に最善の方法を考えてもらい、支えられてきました。この七か月のターミナルの時間は、私

たちにとって「祈りの時」でもありません。長い短いではない、一生の中の不思議な、でも大変長い時間でした。その時を一緒に過して下さったスタッフの皆さんに深く感謝します。

今ごろ、娘は天国で大好きな絵を描いていると思えます。それからもう半年、先生に負けないように、スキーの練習も……。



司会・須磨アナウンサーによるインタビューに答える長尾さん(右)

読売新聞社賞

『家族』の時間



及川 しのぶ

(23歳)

岩手県水沢市・会社員

だれもが冬の寒さに震え、暖かい春の日差しを待ちわびる二月、私たちの愛する彼は三十二歳という若さで静かに息をひきとりました。

頭痛と体のたるさを訴えながらも、日々の忙しさに病院も足遠くなり、「脳腫瘍」という最悪の診断を受けたのは葬式からわずか一か月後の事で、その時私のおなかには小さな命が宿っていました。彼が入院した工大学付属病院は、私た

すでしたが移動もできるまでに回復してきました。このころ彼は、車いすに座った自分のひざに千春を座らせ、私が車いすを押すというスタイルで病院内を散歩するのが日課になっていました。廊下ですれ違う人に「かわいいね」と娘がほめられるのが楽しみのもので、人の多い一階の外来によく行ったものでした。本来なら、抵抗力の落ちている彼に無理は禁物だったのですが、看護婦さんたちも見て見ぬふりをしてくれていたようです。看護婦さんたちは、本当に明るく優しい方ばかりでした。私たちと同年代の方が多かったため、趣味の話やテレビの話など、忙しい中いろいろと話しかけてもらい、私たちの一つの楽しみとなっていました。千春もナースステーションで遊んでもらったりと、みなさんによくかわいがってもらい、暗くなりがちな病院生活も楽しく過ごせた気がします。「家族」で過ごせる喜びを実感できた時期でした。今思つと、このころが一番幸せだったのかもかもしれません。

ちの自宅からは電車で一時間四十分という遠い所にありました。私は家族に反対されながらも、彼に会いたい一心で、大きなおなかを抱えて毎日電車で彼のもとに通いました。そんな私を看護婦さんたちは心配しながらも、やさしく励ましてくれました。

やがて長い冬が終わりを告げるころ、私たちの娘、千春が生まれました。彼にとつて千春は本当に宝物でした。産院で撮った千春の写真を病棟の患者さんや看護婦さんたちに見せて歩いたそうです。「千春のためにも病気に負けてられない」、それが彼の口癖になっていました。しかし、そんな私たちをあざわらつかないように、病は確実に彼の体をむしばんでいました。脳腫瘍のため「髄膜炎」にまでなり、高熱が続き、ベッドから動けない日々が続きました。私も彼のそばで少しでも励ましてあげたいのですが、今は乳飲み子を抱える身です。妻なのに彼のために何一つ力になれない自分が情けなく、思い悩む日々が続きました。

そして月日は巡り、千春も伝い歩きをはじめたころ、彼の容体は急変しました。けいれんと意識障害のため、一般病棟から、HICという消毒着を着用して入る部屋に移ることになりました。子供はもちろん入ることはできず、面会も一日に三回ほどで、一回五分から十分となかなか会うことができなくなりました。しかし、私は千春を連れて毎日病院に通い続けました。「家族」として一人でがんばっている彼のそばについてあげたかったのです。それから数日後、忘れられない出来事がありました。いつものように病院に行くくと、HICのドアが大きく開いていました。近付いてみると、彼の姿がよく見える位置にベッドが移動してあったのです。「これなら千春ちゃんもパパに会えるよ。パパ、千春ちゃんが来てるよ！がんばれって言うてるよ」。彼の耳元で声をかけ続ける看護婦さんたちの温かい気持ちに、涙があふれて止まりませんでした。



読売新聞社・堀川専務取締役から賞状を受け取る及川さん(右)

このころは彼の母が付き添いをしていましたが、母自身も数年前に大きな手術をしていて、あまり無理のできる体ではありませんでした。長びく入院生活に希望を失いはじめた彼は、その怒りと不安を母や看護婦さんたちになぶつけはじめ、自分の殻にとじこもりがちになり、母の方も体調を崩してきました。「千春を生きる希望にしてくれないだろうか」。そう考えた私たちは、断られるのは覚悟の上で、看護婦さんたちに相談しました。やはり、ほかの患者さんの事や千春自身の負担の重さなどから、看護婦さんたちも悩んだようでした。しかし、彼自身が今一番必要な励みや希望が「子供」なら、それを近くにおくのがベストではないかという温かい結論をいただき、決して無理をしないという条件で、すぐ近くに下宿をし、毎日病院に通つという生活をスタートさせました。千春が来るようになってから、彼は次第に明るさを取り戻してきました。薬の効果でしょうが、体調も良くなり、車い

願いもむなしく、それから約一か月後彼は亡くなり、夜中だったためお世話になった多くの看護婦さんにお礼も言えぬまま今に至つてしまいました。あまりに短すぎた「家族」の時間。しかし、本当に幸せな日々でした。周りの人たちに支えられたからこそ過ごせたこの時間が、今の私の心の支えです。そして、彼が残っていた大事な宝物、千春を精一杯育てていこう、そう思います。



アメリカンファミリー介護賞

「意識の戻らぬ  
夫と共に」



土屋 たづ子  
(52歳)  
岡山市・塾経営者

夫が四十四歳の若さで、脳内出血のため意識不明となって、半年が過ぎようとしていたころのことでした。入院していた大学病院から、「症状も落ち着いてきたので、どこかよい病院を探してもらえませんか」と、それとなく退院を勧められるようになりました。

私は、元気になるまでは病院に置いてもらえるのだと思っていました。植物状

態となってしまった夫をどこに連れていったらいいのでしょうか。大学病院は手術病院だからというところのようですが、ほかに長期間預かってくれるよい病院があるのだろうか。

「三か月ごとに病院を変わらなければならぬのよ」という声も耳に入ってきました。体を動かすことすらも出来なくなつた夫と、三か月ごとに、病院を変わつて回る自分たちのことを考えると、世間の皆様に見捨てられてしまったような惨めな気持ちになりました。今までに大した病氣もしたことのない私たちに、知っている病院などありませんでした。

頼みの綱は、近くのかかりつけのお医者さんであるM先生だけでした。わらにもすがる気持ちで、M先生に相談にいきました。

ところが、先生の答えは私の思いもよらないものでした。「よい病院を探すのは難しいですよ。あなたが大変だけれども、家に連れて帰ろうと思えば、連れて

帰れますよ」と、言われたのです。

私は信じられない気持ちでした。気管切開のある夫を家に連れて帰られるとは思ってもみませんでした。意識がないばかりではなく、気管切開をして、胃チューブもあります。私一人で、家で夫の介護が出来るとは思えません。不安を隠しきれない私に、先生は自信たっぷりに、「母親に勝る医者はなし。女房に勝る医者はなしだよ。それにあなたはまだ若いから、大丈夫でしょう」と元気に励ましてくれました。この先生の一言で、私は在宅介護をすることを決心しました。

M先生が訪問看護婦さんも紹介してくれ、入浴サービスの所も紹介してもらい、在宅に向けての看護チームが出来始めました。

早速、大学病院の方にも、在宅介護をしたい旨を告げました。先生と看護婦さんたちが、私が在宅で一人で夫の看護が出来るように、熱心な指導を始めてくださいました。病院での夫の看護を私が一

人でし、その後を看護婦さんに確認してもらつという過程をふみました。私への特訓を始めてくれたのです。

吸タン、ネブライザーの使い方、胃チューブの入れ方、体位変換の仕方、オシメの処理、歯磨き、七十五キロの巨体の動かし方などを丁寧に教えてもらいました。お陰で、一人で介護が出来るようになり、病院の皆さんの声援に送られて家に帰って来ました。

家に帰った私は、先生や訪問看護婦さんの指導のもと、頑張つて夫の介護をしました。

初めのころは、一人で介護するのは大変でした。夜中に夫のせきで目が覚め、タンを取らないと窒息死させてしまうのではと思ひ、心臓が止まるほどびくびくして飛び起きたことが何度もありました。失敗しないように、失敗しないようにと気を使い過ぎて、疲れてしまい、血圧は上がり、歯ぐきもはれてしまいました。そんな私を心配して、M先生は毎日見に来てくれました。先生に、「大丈夫

だよ。調子が良いようだね」と言ってもらえると、疲れがいつべんに飛んでいくよつでした。

週三回来てくれていた訪問看護婦さんも、介護の要所、要所を押さえてくれ、安心して在宅介護を続けることが出来るよつになりました。

十か月ほどしたころには、介護にも慣れてきて、夫のベッドの横にパソコンを置いて、私たち夫婦の夢であった花の本を書き始めました。

それから一年ほどして、私たちの本が出来ました。本を作ることが出来たことで、私の人生が再び始まったよつに感じました。

夫が倒れて、もう四年五か月が過ぎました。夫は一度も床擦れが出来たことがありません。朝、夫の横で目覚め、連続テレビドラマを一緒に見ながら、夫に食事をおげます。それから、夫の好きだった音楽を聞きながら、パソコンに向かう毎日です。病気になるころには、考えられなかったような穏やかな毎日を過

させてもらっています。

これも、私たちを支えてくださったという医療関係者、介護関係者の皆様のお陰と深く感謝しています。

絶望の中でも探せば道はあり、手を差し伸べてくれる多くの人たちがいることを知りました。

皆が迎える人生最後の日まで、皆様の力をお借りしながら、有意義に生きていきたいと思っています。



アメリカンファミリー生命保険会社・大竹会長から賞状を受け取る土屋さん(右)

特別賞

## 「キスがともした 明かり」



江間 美紀  
(33歳)  
愛知県一宮市・主婦

事故に遭ったのは、今から十五年前、高校三年生の夏休みのことだった。ひざからくるぶしまでの皮膚のほとんどがタイヤにはぎ取られ、ひざを骨折し、筋肉にも損傷を受けた。

救急車で運ばれた先の病院で急激な手術を受け、その何日か後、皮膚移植手術を受けるために別の病院に転院した。毎日が痛みとの闘いだった。八月という季節もあるのか、化のうは思いのほか進んでしまった。体の一部が腐っていく。その痛さはしまいには「足が痛い」という感覚をなくし、頭をガンガン殴られているような感覚に変わる。

あのころは主治医の先生の「リハビリ次第で必ず歩けるようになる」という言葉だけを頼りに、今、課せられている痛みに耐えることだけで精一杯だった。次第に入らなくなっていく点滴の針も、手の甲や指先、足先に刺され、その跡は紫色にはれた。しかし徐々にだが化のうの進行も止まり、やっと移植手術のめどがつき、やがてその日が来た。術後の痛

みも激しかったけれど、その手術が終わって精神的には何かが変わり始めていた。心にかかっていた霧が薄くなり、周りが見えてきたのだろうか。今つきつけられている現実には、かたくなにつぶっていた両目を少し開け、もっと向き合わなくてはならない。逃げてはいられない。だが両目を見開いた時、失ったものはずいぶん大きく残酷なものに見えた。

日常の歩行に差し支えはなくなるだろう。でも以前のように走ったり跳んだりできない。正座も無理かもしれない。しかし十八歳の私にとって一番心配だったのは、その見た目だった。一生だれにも足や体をみせず、隠して生きていくのだろうか。「その機能まで失ったわけではないのに、何せいたく言ってるんだ」と自分に言い聞かせる。そうすることで、私の心は何とか平衡を保っていられたのだ。

手術から何日後だっただろうか。皮膚を切り取った方の背中やおしり、腹部の

ガーゼ交換をした。ピッタリとはりついていたガーゼをはがすのは、まるで生皮をはがされるようだった。処置が終わってふと我に返ると、私の体にサインペンのようなもので何か線が書いてある。自分で全身を確かめられないので先生に聞いてみた。「あ、それはねえ、皮膚を取った跡が水着を着た時見えないように、手術の時書いた水着の形の線。その線の内側で取ったからね」。

十八歳の私は恥ずかしさで何も言えなかった。水着を着るなんて考えてもみなかった。私にそんな未来があるかもしれないなんて。その線は先生たちが私に見せてくれた、ほんのり明るい未来だった。そしてキプスはずす日が来た。事故に遭って以来、一度も見えない私の右足、白く覆われていたその現実がむき出しになって目の前に現れると、私はただただショックに打ちのめされた。いびつな形の棒に赤紫色の皮がへばりつき、百何十針分の糸が絡みついていて、「大丈夫。抜糸すればもっときれいになるか

ら」。……先生や看護婦さん、家族のどんな慰めの言葉も心の底までは届かなかった。まさかこの足をさらけ出して水着を着るなんて。先日まで心を熱くしていた私の小さな未来は、みるみるしぼんでいく。その時だった。言葉もなくぼつ然としている私を見て、手術を担当した先生の一人が、「こんな大成功久しぶり。いや初めてかなあ！ よかった、よかった」と言っていて、その足に「チュッ！」。

私は耳まで真っ赤になってうつつむいた。涙がこぼれた。その瞬間から、そのむごたらしい私の右足はかわいそうなものではなくなった。私には痛みに耐えた勳章として、先生にとっては会心の成功作品(?)として、祝福のキスを受けたのだ。もつ目を背けない。じつと見つめた。この足で立つ。この体で歩いていこう。

私の立場で考えてくれる人がいる。そう思うだけで心はぐんと強くなれた。その後の苦しいリハビリや、自分の足に向けられる他人の好奇の目にも耐えられた。心にともされた小さな明かりは、十

五年の歳月が流れ、軽い障害が残った今でも、ずっと私を温めてくれている。



お子様と一緒にインタビューに答える  
江間さん(右)

(賞状・表彰額及び賞金10万円)  
半額は平成13年4月1日現在のものです。

# 「セカンド・オピニオン」

中田 ひさえ (38)



札幌市・主婦

医師の診断に異議申し立てをする事はなかなか難しい。医学に関して全くの素人は、素直に診断に従うしかないのだ。では、医師の診断に「それ以外の考え方はありませんか」と尋ねるならどうだろう。ある医師は、「私に何か文句があるのか」と怒るかもしれない。ある医師は、「そう思うなら、ヨソへ行けば」と突きはなすかもしれない。しかし私の出会った医師は違っていた……。

ことの起りは今年六月、七歳の娘のわきの下にできた、小さなできものだった。「ママ、何かプチツとしたものがあるの」「大きなニキビみたいなね。痛い?」「別に痛くないけど、何か気になるんだ」。近所の皮膚科で診てもらい、気になるなら取りましよう、という事になった。「まあ取った方が、その組織を調べて、良性のできものかどうか確認もできますしね」。医師のその言葉がやけに耳に残り、ひどく不安な思いにとらわれた。切除は局所麻酔で三十分ほどで終わった。

それから五日後、嫌な予感が現実のものとなる。病理検査の結果が出たのだ。あの小さなできものは「隆起性皮膚線維肉腫」。皮膚にできる悪性の腫瘍だった。すぐに大きな病院で診てもらおうよう勧められた。

紹介されたS医大病院では、皮膚に腫瘍が残っている可能性が高いので、もう少し広範囲に切除

する必要があること、全身麻酔による切除手術を行い、二週間程度の入院が必要なこと、転移、再発の恐れ比較的小さい病気であることなどの説明を受けた。

「できるだけ早い方がいいですね」。医師はコンピュータの画面にとらめっこしながら、手術日のやりくりをしている。「患者を見ずに、コンピュータばかり見ている、なんて批判されちゃうんですが……。」と言いつつ、娘の手術を少しでも早く組み込めるよう奮闘している様子だ。その気持ちをありがたく思う反面、そんなに大変な病気なのかと、改めてやるせない思いにもなった。

本当に娘は悪性の腫瘍に侵されているのか、切除するしか仕方ないのか、そんな思いを抱えながら、手術の前に必要な心電図、レントゲン、血液検査を終え、入院手続きの説明も受けた。最後に、医師は娘に優しく話した。「悪い所を取ってしまえば心配はいらないからね。でも退院した後、体育は半年ぐらいお休みしなくちゃならないよ。動く傷口が汚くなっちゃうんだ。傷の大きさは十センチぐらいになるかなと思う」。

話を聞いているうちに、手のひらに汗がじつとりとにじんできた。自分の身の上になんか起こったのか、まだよく理解できていないような娘の横顔を見ていると、「もうこれしか方法はないのか」という思いが、また頭をもたげてきた。この小さな体から皮膚をはぎとらなければならぬのか。走ることが何より大好きな娘に、半年も運動を禁止するのはならないのか。

次の瞬間、思うより先に言葉が出ていた。「先生、大変失礼ですが、乳がんでは病院によって、切除する、しないの見解も違つと聞きます。この子の場合、もうこれしか方法がないんでしょうか」

# 「頑張らないで頑張ろうね」

黒田 幸雄 (72)

千葉県市川市・無職



妻の異変を察したのは六年前のこと。それまで妻は十年間も私の父、姉、叔母の病気の看病に明け暮れ、見送った。その間も痴ほう症だった私の母の介護までしていたので、別棟に住む母の夜間の世話だけは私がしよつと母のそばで寝起きた。そのころ三人の子供が、相次ぎ結婚して家を出て行った。さらに隣家に火事があり、妻の心にならず変化が起きはじめていたのを悟った。翌年母が亡くなり、妻のふさぎこむ日が目立つてきた。妻は現在六十六歳。明るく笑顔がよかった。子供のあるから歌が好きで、わが家は妻の笑い声と歌う声が絶えることがなかった。そんな妻が歌も笑顔もなくなり、やせてきた。不機嫌になり、物忘れがひどく、たしなめると怒って外へ飛び出して行った。道に迷って他人に送ってもらったりした。迎えに行き、連れ戻す路上で、かまれたり、たたかれたりして、人から異様な目で見られたこともあった。真夜中に寝ている私の布団をはがして、「ここは私の家だから出ていけ」と言われたことも何度かあった。お金や大事なものをしました場所がわからず、毎日もの探しに追われた。だが、そんな妻が哀れに思えた。これも私の妻への思いやりが欠けていたゆえんだと、すまない気持ちでいっぱいだった。

とにかく病院に連れて行くことに、私はどこも悪くない」と暴れる始末で手を焼いたが、ウオー

キングに行くことと三キロ離れた丘の上の病院まで連れて行くことができた。

S病院、I病院、どこへ行っても、うつ病だと診断された。精神安定剤で多少は落ち着きを取り戻すが、フラフラになり、体力の影響を考えて与えるのをやめた。妻の精神状態は、その後も夜叉になったり、仏になったりの繰り返しが続いたが、救いは仏になった時の、以前の明るさがよみがえる妻の表情だ。「なにもできないでこめんさいね」と言われるとそんな苦勞も吹っ飛んでしまふ。また私に新たな活力がわいてくる。「大丈夫だよ。きつと治るからね」私は自分にも言い聞かせるように言った。「オレは頑張るぞ」と。

なによりも妻の栄養を料理を本やテレビで勉強した。足を鍛えるため毎日二人でウオーキングをした。歩きながら話し合ったり、歌を歌ったりした。水泳が好きなのでプールにもよく行った。教会にも通った。デパートで買い物もした。妻は明るさも取り戻し元気になった。だが、すべてにおいて介助が必要だった。歩いていてもよく転んだ。

その間に妻の脳の変化は進んでいて、病院めぐりは続いた。あるクリニックで「アルツハイマー」といわれがく然とした。一番恐れていたことだった。そんなはずはないと、脳外科で著名な医師を訪ね浜松まで行った。東京の病院にも。最後は地元国立K病院へ行った。結果はどことも同じだった。「もう治りませぬ」とまで言われた。手足は不自由、記憶障害はあっても、妻の意識は正常だと確信があった。現状維持でもいいと思った。

二人で合唱団に入り、多くのいい仲間を支えられた。そして毎日歩いたが、次第に足も弱くなり、よく転倒した。そのころ東京から長女一家が母の住んでいた跡地に家を新築し、転居してきた。娘も加えてリハビリをよく続けた。

医師は、びっくりしたように私を見つめた。が、すぐにすずいて答えた。「お母さんのお気持ち、わかります。親ならそう思うって当然です。それはセカンド・オピニオンを求めるといって、全然かまわないことなんですよ」。思いがけない返答だった。セカンド・オピニオンという言葉も初めてであった。

「S市立病院に、悪性腫瘍に詳しい先生がいます。私の師匠です。そちらでもう一度診てもらいますか。検査結果はすべてお渡しますから」と、すぐに紹介状を書いてくれた。さらに、「こちらでの手術の予約はそのままにしておきますので、どちらでするか決まったら、できるだけ早く連絡を下さい」とも言ってくれた。その親身な対応には、驚きにも似た深い感謝の思いがこみあげた。

すぐに紹介されたS市立病院を受診し、改めて病理検査の結果を見直してもらった。新たに、組織を染色する検査も行った結果、切除範囲はもう少し小さくてもよいとの判断が出た。この症状を数多く見てきたベテランの医師の存在、入院中も快適に過ごせたような新しくきれいな病棟、私は、この病院に娘の手術を託した。

たとえ同じ診断結果であろうと、患者やその家族にとって、「自分が納得して選んだ病院」という思いがあるのとないのでは、病気に向かう気持ちに大きな違いが出てくると思う。娘の入院中は、自分が信頼した医師に任せているのだから……。という思いが不安を抑えてくれた。その意味でも、セカンド・オピニオンを勧めてくれた医師に感謝している。

娘は、術後一か月から、元気に走り回って毎日を過ごしている。

九九年、妻は市の施設でのショートステイ中、転倒した。左肩鎖骨骨折で三か月の安静。車いす生活を余儀なくされた。紙おむつにもなった。本格的介護が始まった。二女も通いで介助してくれたが、夜中の失禁やおむつの交換には一人でも苦労した。なんとかノウハウも体得して、交換から清拭まで早く処理できるようになった。紙おむつの感触を妻の側に立つて自ら試していたり、下もれがないよう研究もした。褥創防止の工夫もした。

二〇〇〇年からの介護保険制度の認定結果、妻は要介護5だった。複雑な思いだった。介護サービス利用枠は最高だが、介護の社会化といわれても人の手にゆだねるには不安があった。自分の手で介護するのが一番だと思った。ケアプランは自分で作成。その直後私は不覚にも足を骨折した。入院・手術と足の傷より心の傷が痛んだ。眠れぬ夜が続いた。

そこに多くの仲間や友人が駆けつけてくれた。善意ある人たちのケアが涙が出るほどうれしかった。娘から「ヘルパーさんがたくさんみえたので大丈夫」と報告を受けた。介護保険制度に感謝した。妻は、「おじちゃん大丈夫なの」と心配してくる。おじちゃんとは私のこと。妻は私の名前も夫であることもわからない。ただ、いつもそばにいてくれる人との認識だ。「おじちゃんありがとございます」。私はできる限り妻のそばにいてあげたい。「介護できる幸せ、介護される喜び」。そこには介護の苦痛より喜びがある。これは介護する者の誇りである。最近の妻は笑顔も出てきた。CDを流すとハミングも出る。

私はもう頑張らない。だが、妻と一緒に生きることに頑張る。いつまでも、「頑張らないで頑張ろうね」と、妻はニコッと笑った。

(賞状・表彰額及び賞金10万円)  
半額は平成13年4月1日現在のものです。

### 「温かさいっぱいの一言」

田村 匡史(30)  
東京都八王子市・会社員



「君はもう歩けない」  
意識が戻って間もなく、私の耳に飛び込んできた衝撃的な言葉だった。担当の医師は私の目をしつかり見つめながら重々しく言った。それと同時に悲しむ家族のことが真っ先に頭に浮かんで、涙がせきを切ったように一気にあふれ出した。  
あれは大学三年生の秋。早朝、寝ぼけ眼で大好きなオートバイにまたがり、さわやかな風に秋を感じながら、一人でツーリングに出かけた。免許を取得して五年。オートバイは私の手足同様であり、いつもの通り、意のままに心地よく快調に動いていた。

「さあ、今日は高速道路ののって、西に走ってみよう！」自然にオートバイは最寄りのインターチェンジに向かった。料金所で料金を支払い、本線に合流すべく、勢いよく走らせた。すると、いきなり目前に左カーブが見えてきた。そのとき「はっ」と目が覚めた。  
「このスピードでは曲がりきれない。どうしよう！」そう思うやいなや、対処する時間もなく、オートバイごと中央分離帯に激突した。私の体は宙を舞い、激しく路面にたたきつけられ、すぐに意識が遠のいていった。  
どのくらい時間がたったのだろうか。目を開ける

と、医療機器につながれ、ベッドの上にあおむけになっていた。そう、そこはテレビドラマで見たとこのない、救命救急センターの集中治療室だったのだ。  
「いったいどうしたのだ。これは夢ではないだろうか」  
ゆっくりと記憶をたどってみた。そうしている

と中年の医師が看護婦とともにベッドサイドに現れ、ケガの状態を淡々と説明して立ち去っていた。  
歩けないなんて信じられなかったし、信じられなかった。ひたすら夢であることを願った。そう言っても、確かに胸から下の感覚がない。「今後、一生寝たきりなのか。家族にたいへんな迷惑をかけてしまった」「歩けないなんてウソだ。いつか歩けるに違いない!」「もう一度オートバイに乗りたい!」その後、治療とリハビリテーションを終えるまでの約一年間、入院生活を送った。その間、数多くの医師、看護婦、理学療法士、スポーツ療法士と出会った。その場を乗り越えることだけでなく、これから生きていくことを考えて、治療や看護、指導をしてくれた。  
「もし、自分が相手の立場だったら何をしたいか。そして、これから生きて行くために何が必要か」そこには紛れもなく、思いやりを持った、患者の立場に立って治療やりリハビリテーションを進める医療従事者がいた。どんなに勇気づけられ、どんなに夢や希望を与えてくれただろうか。横になったままでも、自分で食事できるように工夫してくれたり、天気の良い日には外にベッドごと運んで日光浴させてくれた看護婦。悩みや不満を親身になって聞いて、アドバイスをしてくれたり、

世の中にはハンデを持ちながらも一生懸命生きている人が数多く存在することを教えてくれた医師や理学・スポーツ療法士。そのおかげで、私は社会復帰を目指して、希望を持って頑張ることができた。そして現在、自立して生活している。さらに、国内で車いすによるダウンヒル競技の第一人者になった。言うまでもなく、患者の立場に立った思いやりと優しさをベースにした「治療と看護」のたまものである。もしそこに、体裁や建前があったとするならば、いかなる言動も無力であり、現在の私は存在しなかったであろう。

ところで、入院生活を振り返ってみて、何よりも心に残っているのは、あの医師の言葉なのだ。もし、彼がちゅうちょして、あのタイミングで事実をストレートに伝えてくれなかったら、私の社会復帰は遅れたであろう。いや、復帰できずに、ひたすら夢と現実の間をさまよっていたに違いない。確かに、内容が深刻または重大であればあるほど、事実をありのまま伝えることは敬遠したくなるし、敬遠しないまでも婉曲に表現することが多いだろう。しかし、それは患者のためになるだろうか。  
この厳しく冷たい一言には、ずっしりと重みのある思いやりが凝縮されていたと思う。そしてこの言葉なしでは、それ以後の治療や看護、リハビリテーションが生かされなかったのではないかと

思う。  
「君はもう歩けない」  
それから八年。年を経ることに興行きのある、温かさのこもった一言になっている。

### 「再会のほほ笑み」

長坂 かの子(42)  
東京都中野区・会社役員



「これはうば捨てた」と思った瞬間、せきを切ったように感情があふれ出し、私は号泣を止められなかった。あわてて駆け込んだ近代的な車いす対応トイレの中で、私はまるで壊れてしまったかのように泣き続けた。  
九十五歳のまだらほほの祖母を、自宅で介護して四年前に入った六十五歳の母が、ハンドバッグ一つを持って診察に赴いた病院へ、緊急入院してしまっ

て九十五歳の祖母が、ある日突如として一人っ子である孫の手にゆだねられることになった。家庭と仕事を持っている私が、二十四時間介護を必要とする祖母の面倒をみることは無理だった。祖母を託すことのできるしかるべき施設を探さねばならなくなった私は、探せば探さねば理不尽なまでに厳しい介護の現状を知ることになった。それでも、あきらめるわけにも、引き下がるわけにもいかなかった。入院した両親二人、そしてさらに祖母と、一挙に三人の命が私の手にゆだねられたのだ。ようやく、祖母を預かってくれる老人保健施設と病院が併設されている所を探しあて、まずは検査入院させてもらうことが決まったのは母が緊急入院してから五日後のことだった。

状況がのみ込まない祖母をだますようにタクシーに乗せたが、その車中でも祖母が新しい環境をどう受け止めるのかが心配で、胸がときどき

生きた心地がしなかった。診察を始めすべての手続きが終わり、病室に落ちついた祖母を置いてロビーに下りてきた私は、まるで背負子で山頂に祖母を置いて、うば捨てをして山を下ってきたような心境だった。緊張で張り詰めていた私の気持ち

が、安くと不安で揺れていた。  
「安心してください。おばあちゃん、私たちがちゃんと面倒をみますから」。ロビーまで見送ってくれた看護婦さんの優しい言葉を聞いたとたん、私はそれまで何とか抑えていたものが、おえつと共に一気にこみ上げた。自分の感情の抑制が全くなくなって号泣となった。何かと見ている人の目もはばからず、壊れてしまったかのように泣く私は、病院のトイレに駆け込んで声がかれるまで泣き続けたのだ。

祖母の一人息子である私の叔父は地方の開業医であったが、年末の最後の診療が終わったその晩に、六十四歳で急死した。東京の医大を卒業して地元に戻り、地域医療に一生をささげた人生だった。茶の間のコタツで、弥勒菩薩のようにほおつえをついて眠るように亡くなっていった息子を初めに発見したのは祖母であった。葬儀が終わるまで気丈に振る舞った祖母の様子がおかしくなったのは、葬儀から数日たったところである。その後、娘である母が東京に祖母を引き取り、急速にほげが進行してゆく祖母を自宅で介護する日々が始まった。  
母は曰くことにほげがひどくなる祖母を介護しながら、「お母さんのイメージが、私の中で崩れていくのよ」と言って、泣いた。なぐさめる言葉は私にはなかった。

ある日、私が祖母の病室にいた時、担当の先生が回診に訪れた。一風変わった医師で、話しながら目の玉がぐるぐる回り、患者によっては怖が

てしまう人さえいると聞いていた。「Fさん、気分はどうです?」と尋ねた先生に向かって祖母は、ベッドに横たわったまま、にっこりとほほ笑みで黙って手を宙に差し伸べた。その瞬間、私ははつとして祖母の手を見つめ、O先生を見つめた。宙に差し伸べられた祖母の手を、O先生はゆっくりと両手で包んで、しつかりと握り、祖母にほほ笑み返した。その瞬間、私は、祖母が亡くなった叔父と手を握り合っているのがわかった。

祖母は、ほげが進行した今、白衣を着て診察に現れるO先生に、今は亡き息子の姿をだぶらせているのだ。多くの患者がいるのに、祖母の経歴をしつかりと記憶していたのである。O先生は、すぐ祖母の気持ちを理解してくれたのだ。その瞬間、二人を包む時はおだやかに止まり、ベッドに横たわる祖母が差し出す手を握るO先生と祖母の間に、心の橋がしつかりと渡ったのが私には見えた。二人は完全に、周りにいる私や看護婦さんと隔離された次元空間の中にいた。手を握り合ったまま、祖母とO先生は長い間ほほ笑みを交わっていた。その温かさ、二つの心がびったりと重なりあった様に、私は声もでなかった。祖母を医療施設に預けることへの不安と罪悪感にさいなまれていた私が、「うば捨てではなかった」と、自分をさいなむ苦しみから初めて解き放された瞬間でもあった。

祖母は九十六歳の誕生日を迎えた直後、O先生にみとられてその生涯を閉じた。悲しい老人医療の二コーズや報道が多すぎて、O先生にみとられて生涯を終えることができた祖母のことを思うたび、私の心は今でもほほのほのと明るくさえる。O先生を通して亡き息子と再会し、その手を握りながらこの世を去っていくことができた祖母の最後の幸せと、それを与えてくれたO先生の医師としての姿勢に深く感謝をしながら。

「娘と私の思い出作り」

落合 三枝子(50)  
神奈川県鎌倉市・主婦



悠花様  
間もなく発病した憎き一月二日がやってきました。もう二年になるんですね。たくさん楽しい思い出が、心の中に刻まれていることが、お母さんを支えています。思い出作りに関与して下さったのはレジデントの先生方、病棟の看護婦さんたちです。ね。初めての入院生活、女医さんのS先生はいつもそばにいて、あなたの良き相談相手でした。ですから自分の病気については私よりも詳しく理解していました。テレビを見ながら騒いでいる二人は、まるで友達関係のようでした。忙しい時間を割いて夕食を一緒に付き合ってもくださいました。個室で退屈した時に、バイオリンを弾くあなたに、S先生はチェロを弾かれるK先生を紹介してくださり、狭い個室でたった二人だけの最後のアンサンブルが実現しました。マスケ、キヤップ、ガウンを着けながらアイネ・クライネを演奏する先生はお気の毒でしたが、満足感に満ち、喜々としたあなたを見たのも久しぶりでした。翌日、「きのうは興奮して眠れなかった」と言った声が、まだ私の耳に残っています。「これからは音楽の友になるう」とおっしゃり、あなたは薬の副作用のマトで二度とバイオリンを奏することはあられませんでしたが、先生は何度か病室を訪れ、CDをプレゼントしてくださりましたね。その時のあ

なたの顔は心の悩みが解けるように穏やかで、私に見せたことのないやさしい顔でしたよ。学会でロンドンに行かれた時には、英文で給はがきを送ってくださり、一緒に読んだね。最後に「want to play with you someday. Yuka.」書いてありました。

病院という病を治す場所でああなたは人生を終結させるように、恋をしたり、レジデントを「私のボーイフレンド」と勝手に決めたり。あなたの積極的に行動したい気持ちを実行に導いてくれたのは、看護婦さんのAさんでした。Aさんがあなたの気持ちを酌んで、真夜中、ボーイフレンドと病室でデートさせてくれたんですね。「一時間半、絶えず笑い声が廊下に聞こえ、とても楽しそうだった」と言っていました。その後、危篤状態を脱出したあなたが車いすでボーイフレンドのY先生に出会った時、先生はあなたの横にひざまずき、タオルケットの中からあなたの手を取り出し、自分の両手に挟んで、「悠花ちゃん、今とても嬉しいんだよね。でもこんなに力がある。まだ頑張れるね。元気になったらステーキでも何でもごちそうするから」と目線を合わせて励ましてくれました。その優しさあふれる姿を見て涙をこらえていたのがわかりました。あなたが逝った日、先生は「今までなんで人間なんかに生まれてきたのだらうかと頭張っていました。悠花ちゃんに出会っていつも頑張っている悠花ちゃんと同じ人間で良かったと思いました」と言ってくださりました。すばらしい小児科の先生になるように見守ってあげてください。それが、あなたのボーイフレンドへのお礼です。

たった十六年の人生。でもあなたはこの半年の入院生活で一生を凝縮させてしまうほど、苦しかったけれど豊かな体験をした日々でした。それは

「何もしない治療」

藤井 美弥子(23)  
横浜市・大学生



祖父が亡くなったのは、昨年の七月である。「自分の家で自然に死んでいく」と言い続けた祖父は、住み慣れた自分の部屋で毎日を過ごしていた。

食事もろくにすることができない中、体力の衰えはだれの目から見ても明らかだった。それでも、「私はここで死ぬ」という祖父の態度には変化がなかった。

その祖父が入院したという知らせを受けた。私は見舞いに行く準備をしつつ、あんなにうちに住み慣れた祖父が急に入院を選んだのだから、悪いことばかりが頭を回った。

病院に行き、そこで見た祖父の姿に私は驚いた。顔色が格段によくなっているのである。つい数日前会った時は、祖父の顔色はだれが見ても悪かった。血の気は引き、目ばかりが目立っていた。

その様子が一変し、話す声もしつかりとしている。「急に入院したと言っからびっくりしたけど、何だ、元気じゃない」という私の問いに祖父は「入院する直前は、あきらめて救急車を呼んでもらうくらい苦しくて、どうしようもなくて。それなのに、ここで診てもらったら楽になって。これならもっと早く来とけばよかつた」と笑いながら答えた。

次の日も私は祖父の所に行った。すると祖父は「ここに一晚泊まったとしたら、俳句がいっぱい浮かんじまって。これがいいやつばっかなんだ。でも、管（点滴などのチューブ）が邪魔で書けない。代わりに書いてくれるか」とニコニコしながら話し掛けてきた。

これが同じ人か、と思うような変わりようだった。数日前までは寝ているのがやつとの人が、今は俳句ができて困ると言うほどの余裕がある。もっと早く入院していればよかったのにと感じながらも、私は祖父の言うとおりに俳句をメモし、翌日清書して持って来ることを約束して家に帰った。

その翌日、私はまたもや驚かされた。昨日までの祖父はもういなかった。意識はもうろうとして、俳句の話などできる状態にない。「帰るね」という私に対しても手を握り返すことしかなかった。昨日からのあまりの変化に涙が止まらなかった。

その翌日、祖父危篤の知らせがきた。急いで駆けつけた私の目の前にいたのは、ただ眠り続けているように見える祖父だった。「おじいちゃん、わかる？」と話しかけても、「わかる」ともいっようなうなずくのがやつとのようだった。

何もできず、ただ祖父を見守り続けて数時間がたったころ、祖父がふっと目を開けた。そして周りを見渡した。「わかる？ みんなここにいるよ」と声をかけると何度もうなずき、そして涙をためた目でそこにいる人すべてをじっと見つめた後、目を閉じた。それが祖父の最期だった。

看護婦さんたちが同情で付き合うことなく、心の友達になるうと接近してくださったからではないでしょうか。あなたとお母さんの思い出作りのパイ役になってくださった看護婦さん。入院して初めての外泊を勧めてください、もう感激できる力はありませんでしたが、自分のベッドに半年ぶりに入り、翌日、病院に着いたあなたは四時間後に自然に息が止まりましたね。それは先生と看護婦さんによって築いていただいた思い出を胸に、ほんとうに安らかな眠りでした。病氣と対峙している時、「退院したら何をしよう」と励ますのではなく、少しでも病人の望みをかなえる方向づけをしてくれ、精神面でも手助けしてくださる人がそばに必要があると、入院生活から学びました。あなたにも私にも幸せを感じるたくさん思い出を持ってのように努力してくださった看護婦さんたちに感謝しようね。おそらくあなたの人生で一番つらかった時、思春期で反抗期の真っただ中のあなたが、素直な本当の自分を取り戻し、どうして自分自身を外に出すことができたのか、不思議なことでした。今、闘病生活を振り返り、答えが出ました。それはあなたを大事にしてください。たくさん先生、看護婦さんに囲まれているから大丈夫ということ。今日も心の中の思い出を取り出し、一日頑張りました。

じゃあまたね、悠花。 母より

追伸  
六月に病院の創立記念音楽会でK先生がオーケストラにお姉さんを参加させて下さいました。もちろん指揮はK先生で。そしてね、いすの上にああなたの写真を置いてくださり、あなたも一緒に演奏したんですよ。I want to play with you someday. Yuka.の約束が果たされました。美しい音色、天国まで届いたでしょ。

つた。

限界まで自分の生き方を守り、家で過ごしてきた祖父が自分から入院してきたとき、その生き方を認め、「治療はしない、でも苦痛だけは取るう」と明言してくれた医師がいた。彼がいたからこそ祖父も病院にきたことを後悔するどころか、早く来なかったことを後悔することになった。その医師は心電図モニターを見ていて祖父の異変にすぐ気づいたらしい。それでも彼は病室に來なかつた。それは祖父の「自然に死ぬ」という希望を最後まで取り入れたからである。そのことにより、私たち家族は祖父の最後の時間を共有することができた。

もし、あのまま祖父が家で最期を迎えていたら、自信作の俳句も作れず、家族と笑顔で会話することもなかったらう。病氣を治すことではなく、今この時点の苦痛を減らすために入院してきた祖父に、望む治療を与えてくれる病院があったことが祖父の最期を輝かせたと思つた。

「治療はしない」というのは医師や病院にとって「何もしない」というのと同義語かもしれない。しかし、それこそが私たち家族全員に対する「治療」だったように思つた。



(賞状・表彰額及び賞金10万円)  
半額は平成13年4月1日現在のものです。

「息子の夢」

佐藤 宜子(41)  
愛知県尾張旭市・主婦



先生の手の中には五ミリほどの小さな針金があった。よく見るとまわりには人工繊維の細かいはけがついている。それを長いカテーテルの中に入れて、手元で何らかの操作をすると、針金はくるくと丸まってコイル状になり、最後にカテーテルの先端からぼろっと出てきた。まるで魔法のように。思わず息子と歓声をあげてしまふ。先生が見せてくださったのは、翌日息子の体の中で行われる治療のシミュレーションだった。精巧な治療のシステムもさることながら、自分の目でじかに見たということのすごさに私は感動していた。この説得力はどんなに詳しい説明を何度重ねてもきつとかなわないだろう。「見る」ことの持つ圧倒的な力を実感させてもらった。

現在十二歳の息子には生まれつきの心臓病があった。二歳の時にかかりつけの小児科医院で見つかり、専門医のいる病院を紹介された。そこで息子の主治医となる先生と出会った。

本来なら胎児期にだけ使われて生まれると自然に閉じてしまう血管が、完全に閉じないまま残り、血液が流れてしまふというのが息子の病気だった。幸い息子の場合は日常生活に大きな支障が出るほどではなかったが、この病気は程度に関係なく手術を要することだ。それらの説明の後で先生は何気なく、でもきつぱりとおっしゃった。

「今は切らずに治す方法が進められているので、少し時間はかかるかもしれませんが、それでいけると思います」と。開業医の先生からの紹介状を手にしてから、素人なりに心臓の病気について調べて診察に臨んでいたのが、手術という言葉にあまり驚きはなかったが、この最後の言葉には大いに心が動いた。息子の病気に対する手術は心臓の手術としては歴史のあるもので、すでにほぼ安全にできるものとなっていた。それでも体にかかる負担や入院期間などを考えると、それらのすつと少ない切らずに治すやり方は魅力的に思えた。

カテーテルを使って行われることからカテーテル治療と呼ばれるこの方法は、息子の病気に関する限りでは当時日本ではまだ始まったばかりの新しい治療法で、賛否両論いろいろあったようだった。厚生省の認可はなかなか下りなかった。検診に行くと、先生はよく「長くお待たせしてすみません」と言いながら、学会や研究会での最新情報を伝えてくださった。良いことも悪いことも包み隠さず話してくれる。正直言って、「新しい」ということになったく不安がなかったわけではない。けれども私先生の誠実で根気強い姿勢は、それまで私が持っていた「医師」に対する心証をよわらかく変えていったようだった。この人に、カテーテル治療に、かけてみようと思ふようになった。そして、先生の話をなるべく正確に受けとめてきちんと考えたために、自分なりに情報を集めはじめた。先生はそんな私の質問にもいつも丁寧に答えてくださった。認可を待つ時間は確かに長かったが、その間にいろいろなる意味で勉強できたし、息子も成長して自分の病気や治療について理解できるようになっていた。

数か月から半年ごとの検診、カテーテル検査入

「看護師さんとの出会い」

和辻 麗子(40)

滋賀県八日市市・主婦



病気持ちい病気というものをしたことのなかった私が、開頭手術を受けることになった。突然の病気の宣告に加えて、お産以外では初めての入院ということも重なり、かなりの不安を抱えたまま病室へ案内された。

そこで主治医に次いで紹介されたのは、素朴な感じのする青年だった。「あなたの担当の看護師です」。彼は穏やかな笑みを浮かべながら、いろいろと質問を始めた。混乱した頭でその質問に答えながら、同室の患者のベッドに掛けられた名札に目をやると、そこには主治医名と共に看護師名が記入されていた。その時やと私は、自分の担当が「看護師さん」ではなく、その病棟でただ一人の「看護師さん」なのだと思ふことができた。

彼は休日以外毎日私の元を訪れ、「気分は悪くないですか」「痛いところはありませんか」「何か心配なことはありませんか」と問いかけてくれたが、私は素直に心を開くことができなかった。それは彼が男性だからである。男性である彼に女性特有の体調について話すことには抵抗があったし、主婦の心配事など話したところで理解してもらえないはずがない。ちょっとした雑談も同性である「看護婦さん」と交わすのとは違う。隣のベッ

ドの患者が看護婦さんと楽しそうに談笑する姿をうらやましく思った。

やはり彼の担当である同室の年配の女性が退院する前夜、彼はその日の勤務を終えたと病室を訪れ、翌日自分は休日のであいなのであいつに来たかと告げた。しばらくの間二人は話をしていたが、彼はすつとベッドに腰掛けた小柄な婦人に視線を合わせるように、その足元にひざをつけてしゃがんでくれた。決して大柄でもなく、すぐそばにいたが、あつたにもかかわらず彼はそうしていた。私は彼の優しさを見たような気がしたが、彼と接する時の気持ちにあまり変わりはない。

三週間の検査期間を終え、手術を受けた私は、術後の経過が思わしくなく、食事をとることも、体を起こすこともできずに二週間を過ごした。ようやく体を起こせるようになると、しばらく子供たちと会っていないこと、一か月後に再手術を行うと告げられたことなどが頭に浮かび、気分が落ち込んだ。そんな時、彼がやってきて「髪を洗いましうか」と声をかけてくれた。まだ歩ける状態ではなかったので丁寧に断ったが、車いすに乗り大きな洗面台でシャワーを使って洗うからと、もう一度動めてくれた。申し出に甘えてお願いすると、すぐに準備にとりかかり、手術の際についた血などで汚れた髪を丁寧に二度洗ってくれた。久しぶりの洗髪は、心まで軽くなるくらい気持ちよかった。

ドライヤーで髪を乾かしてもらいながら、私は不思議なくらい素直に自分の気持ち話すことができた。抱えている不安や寂しさ、それと同時に看護師である彼を受け入れられずいたことをわびたが、「年配の女性でも嫌がられる方はおられ

院を経ながら八年、やっとゴーサインが出た。治療法についてはこれまでに何度も聞いてきたので大体はわかっているつもりだった。が、もともと好奇心の強い私にはもうひとつだけ見たいものがあった。それは血管をふさぐのに用いるというコイルだ。模式図は見たことはあったのだが、一生息子の体の中に入ってしまったことを思うとせひ実物を見ておきたくて、「できればコイルを見せてほしい」と頼んでみた。こんなことまで言い出す患者はきつと初めてだったんじゃないだろうか。先生はちよつとびっくりした様子で「うーん、写真ならすぐあるんだけど、まあ考えてみましょう」という返事をくださった。なんとかが写真は見せてもらえそうだからに思っていたら、治療の前日「ちよつとおもしろいものがあるから来てもらおう」と、とっておきのいたすらを用意してきた子供のような表情で(先生ごめんさい!) 私たちを誘いにいらした。ドキドキしながらついてゆき、案内された部屋で見たのが冒頭の部分だ。

小児科が多分一番混雑する夏休みという時期を考えると、写真一枚で済ますことだつてできたかもしれない。それすら忘れられることも珍しくないだろう。なのに、ここまでやってくださったことは私たちにとつて忘れられないくらい思い出になった。改めて誠実な医師と出会えてよかったと感じている。

先生に入れてもらった二つのコイルを胸の奥であたためながら、息子は元気いっぱいに過ごしている。最近、彼の将来の夢のリストには「先生みたいなお医者さん」が加わつたらしい。

ますから当然ですよ。抵抗のある時はすぐに看護婦と代わりますから、遠慮なく言ってください」と笑った。そして、病室へ私を送りよけると、「公衆電話のそばにいます用意しますからお子さんにお電話をされてはいいかがですか。きつと元気が出ますよ」と付け加えた。その言葉がとても優しく心に響いて感激している時、ふと術後毎日使っていた吸い飲みが目に入った。夜中に目を覚ますと、彼がお茶を満たしてすつと病床上に置いて行つてくれたことを思い出した。その吸い飲みはとてきれいに洗われていて、少しの茶渋も付いていない。改めて、男性であるというだけで、看護婦さんと同じ志を持って医療の道を選んだであろう彼を、受け入れられなかった自分を恥じた。

その後もいろいろお世話になり、一か月半後に二度目の手術を終え、無事退院できることになった私を病室に訪ねてくれた彼は、「よかったですね。検査のとき外来で会えるといいですね」といつもの穏やかな笑みで見送ってくれた。まだ看護士という職業を持つ人は少なく、「看護士さん」のお世話になることも多くはないが、体を思うように動かせない時など、力の強い彼らの存在はとて頼もしく、貴重なものである。力だけでなく、気持ちも「看護婦さん」に負けないくらい思いやりが深く、繊細なものだと思ふ。また、看護士だからこそできることがあるかもしれない。それを受け入れられる看護婦が一人でも多くなり、彼らが持っているものを少しでも多く医療の現場に生かすことができれば、そこに携わる人たちにとつても、私たち患者にとつても、きつと有意義なものになるに違いない。

(賞状・表彰額及び賞金10万円)  
※当選は平成13年4月1日現在のものです。

# 「ごめんなさい、手を握ってあげる」としかできないの」 「くしくも二度目の出会い」



湯浅信次郎 (65)  
兵庫県尼崎市・無職

不幸は突然やって来た。今から十五年前の春のことだった。不慣れた仕事への転属、家庭内のゴタゴタ、そして追い打ちをかけるかのような不健康な生活が続いていた。

そのツケはやがてやって来た。日中のけん怠感と夕方になると必ず襲って来る悪寒と発熱、それでも当初風邪でもごじらせたかなと思っていた。しかし、胸部の痛みに加え、血痰が混じるに至り、たまたま会社の診療所を訪れた。

診察を終えると、先生は厳しい面持ちで、「かなり貧血がありますね。肺炎の疑いもあります。この紹介状を持ってこれから大病院へ行ってください。あらかじめ予期したことはいえ、足が震えた。大学病院での診断は、不安を確定的にした。間違いないと思いますが、骨髄検査をしましょう。それと入院手続きをして下さい。」

血液のがん？一瞬目の前が真っ白になった。診断は、急性骨髄性白血病だった。即入院し、諸検査の後、治療が始まった。当時の白血病の治療は化学療法が第一選択であったが、マニユアル化され確立されていた。

抗がん剤による治療の副作用は想像を絶した。感染

症予防のためか、無菌室に入った。身の置きどころもないけん怠感と、絶え間ない吐き気、極度の食欲不振にあえぎ、体中にゲリラ的に襲って来る痛みが苦しんだ。

一週間にわたる抗がん剤とステロイド剤の徹底的投与、二、三週間の回復期をクールとした治療が続いた。治療が積み重なるに従い、体力とそれに伴う意欲が次第に低下していった。三クール目の治療に入り、寝返りもままならない状態が続いた。早く楽になりたい、もっとうでも良いと思った。

その時である。一人の看護婦さんが病室に入ってきた。苦しい……と思わずうめいた。彼女は、苦しいのね、ごめんなさい。こうやって手を握ってあげることもしかできないの」と手をじつと握りしめた。目にうっすらと涙をためていた。

苦しい中、なんととも言えない感動が走った。よし、もう一度頑張ろう、この苦しさを共に分かち合ってくれる人がいるのだ。まだ看護学校を卒業したばかりか、初々しく清らかな看護婦さんであった。しかし私には天使に見えた。

この一言が私をよみがえらせた。ついに壮絶な病魔との闘いに勝ち、五か月後退院した。

患者にとって看護婦さんとは何であるうか。医師への信頼度とは違った意味で心の支えである。対応が速い、医療技術が優れている。主治医との連携がスムーズで、かつ的確である。これらは患者にとって心強いものである。

しかし、患者にとって一番大切なことは、一番望んでいるものは、痛み、つらさを分かち合える看護婦さんである。痛み、つらさは生きる意欲を失わせる。あの看護婦さんの一言が、生きる意欲を呼び戻したに違いない。

十五年の歳月がたち、今度はC型肝炎ウイルスによ

る肝臓疾患で、再び同大病院へ入院した。手続きのためナースセンターに立ち寄った。なんとそこに十五年前に私に命を吹き込んでくれた看護婦さんを見いだした。

長い歳月が彼女に自信と貴族を与えていたが、紛れもない昔の面影を残していた。近くを通った看護婦さんに「あの看護婦さん十五年前からここに？」。部署はいろいろと回っていたようだけれど、今はこのベテラン看護婦さん、親切で患者さんの受けも良く、婦長さんに次ぐ人です。」

十五年前にタイムスリップしたような安ど感が広がった。二度目の出会いであった。病院の外へ、入院患者にお年寄りが目立つ。高齢化はますます進み、この傾向にさらに拍車をかけて行くであろう。また大病院、大病院は難病に苦しむ患者が集まる。苦しい検査の連続、不安と痛み、残した家族への思いなど、心身共に疲れ果てている。

一方、看護婦さんは、一瞬のミスさえも許されない。ちよとした気の緩みが患者の命にかかわる。人手不足による仕事の過密化、それでも笑顔で患者への対応は欠かせない。ナースセンターで頭を抱えて座っている姿に、その疲労度を垣間見ることができている。

良い病院とは何であるうか。医師の高度な技術、精度の高い医療器具、清潔な病棟、もちろんすべて大切である。しかし一番大切なものは、医療スタッフ全員が患者への思いやりである。とりわけ最も身近な立場にある看護婦さんの、患者と痛みを分かち合う心である。

思いやりが患者の心を開き、生きようという意欲が生命力を生み出す。そして、自然治療につながる免疫力を高め、ひいては患者の生命予後を左右するとも言っても過言ではあるまい。

# 「あばよ！の先生」



池田 早希子 (44)  
徳島市・主婦

我が次男は、ウィリアム症候群という病名をもつ障害者である。生後四か月で心雑音がある事がわかり、それから三歳までの二年半の間、言葉話すのも歩くのも遅く、遅延の理由がわからず、県立子供病院のありとあらゆる科を回った。混み合う病院で朝から待ち、夕方近く終わる診察に一日がかりで、親子共々疲れてはその原因を調べるため、嫌がる子大侑を連れて幾度となく訪れた。おかげで大侑は「病院」の漢字だけは覚え、病院嫌いになってしまった。医師を見ると、半べそ状態で、尋ねる事は「痛くない？」の連続だった。三歳の誕生日を迎えるころ病名がわかり、遺伝子異常と心臓の弁上狭窄症をもつ知恵遅れだとわかった。診断を下した医師は「もっとう早くわかっていればよかった。悪かったね。心臓の事は僕が診るから、知恵を伸ばしてあげなさい」と正直に言われ、その傍らで看護婦さんは「ご愁傷様」と言わんばかりに私たち親子を哀れんだ目で見ていた。何かのらく印を押され、ならくの底につき落とされたように力が抜け、家までどつたり着いたか覚えていないぐらいのショックだった。たとえ早く病名がわかっていてもショックの大きさは変わらなかつただろうけど……。その後もそでヘルニアなど小さな手術や定期検診で通院していた。

九年後、大侑が十一歳の時、主人の転勤で突然神戸より徳島へ引っ越してきた。小学校は障害児学級への編入がスムーズにでき、周りの子供たちも温か

く受け入れてくれた。心臓の持病があるため、転院の必要があり、紹介状を持って大病院へ行く事になった。生まれつきの障害児はたいてい複数の障害を持つている。手術の事やら細部まで話せば小一時間は軽く超してしまう。聴いて下さる先生の立場を考え、短めに話すつもりで緊張の面持ちでT大学の小児科のドアを開けて医師に会うなり、「音楽何か演奏する？好きでしょ」と問われ、初対面の医師がどつして大侑のそんなブライベートの事をこ存じなのかびつくりした。すると「この病気の子は、絶対音感があつて、音楽に秀でているらしいね、文献で読んだよ」と説明して下さった。確かに音楽が好きで、五歳からリトミック、ピアノを続けていた。昔は専門書に身体的な病気の事は書いてあつても、その性格的な特徴などほとんど知らなかつた。ただ好きで音楽をしていた。音楽の話からM医師とは話がはずみ、大侑も緊張をほくしていった。帰り際、M医師は大侑に「あばよ！」と一言、語いが豊富な事もこの病気の特徴だとご存じで、大侑の反応をこ覧になりたかつたよつた。それからというもの大侑は「あばよの先生」と会つのを楽しみに通院している。

二度目の診察時、先生は文献のコピーをちゃんと持ってきて下さっていた。ありがたかつた。大侑が診察の折、たて笛やバイオリンを持参すると、インターの先生を数名集めて三分ほどのミニコンサートをさせて下さる。夏休み、いっばいの人だるうからと楽器は持たずに行くよと「何だ！持ってこなかつたのか。じゃー」と言つて、先生の机の上で腕相撲をとつて下さる。あんなに病院嫌いだった子が注射であろうが、痛い検査であろうが我慢し、静かにしている。「修学旅行のお土産持つて行く」というほど先生を気に入つたよつた。ある日、先生から「大侑と同じ病気とわかつた親が大変ショックをうけているから相談のつてあけてくれませんか」と頼まれ、立派なアドバイスはできなくても、少しでもショック

クが軽減できるならと電話した。同じ痛みを共有し、わかりあえ、電話口でお互い泣いていた。親としていまだ我が子の障害を認めたくないという段階だった。それは無理にわからせなくても時が悟らせてくれるのを私は知つていたので、ただ相手の言う事を聞いていた。M先生はそれをすべて承知されていたように思う。それ以上先生が話すよと医師として半ば強制的に認めさせてしまつ事になるから……。なぜうちの子だけが……という親には親のかつとつがある。

「病は気から」ということわざがある。M先生は患者の身体的な病気を通して内面まで診て下さっているように思う。子供の場合、その親の心理的影響まで考慮されているのかも思う。週に何人も手術を受けもつ多忙な先生なのに、その人柄の良さがゆえだろつうか。長くても一回の診察で十五分ほどが先生と大侑の接点だが、こんな信頼でき、親子共に良き理解者ともいめぐり合わせができた感謝している。だから、大侑がいつ手術をする事になつてもM先生がいるからと安心していい。当の本人の大侑は、日々楽器演奏に励み、次の診察時には「ぼくの三味線ではあばよの先生に阿波おどりを踊らせる」とはりきつている。



# 表彰式の模様

# 主な募集告知



**大島さんを表彰**  
 医療体験記コンクール  
 第19回「心に残る医療」  
 大島さん(16歳)が賞状と副賞を受けた。

**ニユース スポット**  
 ◆「医療体験記」表彰  
 医師の介助にまつわる体験  
 を発表した第19回「心に残る  
 医療」私の体験記コンク  
 ール(読売新聞社、日本医  
 師会主催)厚生労働省後援、  
 アメリカンファミリー生命  
 保険会社協賛、暮しの手帖  
 社協力の表彰式が2日、  
 東京の帝國ホテルで行われ  
 た。厚生労働大臣賞を受賞  
 した栃木県大田原市の県立  
 大田原女子高一年大島江  
 さん(16歳)が賞状と副賞を  
 が贈られた。

2001年3月3日(土) 全国第二社会面

2000年9月15日(金) 衛星版(中国・アジア)

2000年9月14日(木) 全国第二社会面

2001年3月3日(土) 栃木県版



**「心に残る医療」**  
**土屋さんを表彰**  
 医療にまつわる思い出を  
 つづけた第19回「心に残  
 る医療」私の体験記コンク  
 ール(読売新聞社、日本医  
 師会主催、厚生労働省後援、  
 アメリカンファミリー生命  
 保険会社協賛、暮しの手帖  
 社協力の表彰式が2日、  
 東京・帝國ホテルで行われ  
 た。県からは「意欲の原ら  
 め夫と共に」でアメリカン  
 ファミリー介護賞に輝いた  
 岡山市南、熟練技士陳た  
 子さん(22歳)が出席、賞状  
 と副賞を受けた。写真。  
 脳内出血で意識不明とな  
 った夫を在宅介護している  
 土屋さんは、当初の苦勞か  
 ら、安心して暮らせるよ  
 うになるまで  
 の様子をつづ  
 った。「医者  
 や看護婦、友  
 人など、本  
 人が大勢の  
 支えられて  
 います。これ  
 らみんな  
 楽しんで、頑  
 張っていき  
 たい」と話  
 していた。

2001年3月3日(土) 岡山県版

**「心に残る医療」**  
**江間さん(2)喜び新た**  
 医療にまつわる思い出を  
 つづけた第19回「心に残  
 る医療」私の体験記コンク  
 ール(読売新聞社、日本医  
 師会主催、厚生労働省後援、  
 アメリカンファミリー生命  
 保険会社協賛、暮しの手帖  
 社協力の表彰式が2日、  
 東京・帝國ホテルで行われ  
 た。県からは「意欲の原ら  
 め夫と共に」でアメリカン  
 ファミリー介護賞に輝いた  
 岡山市南、熟練技士陳た  
 子さん(22歳)が出席、賞状  
 と副賞を受けた。写真。  
 脳内出血で意識不明とな  
 った夫を在宅介護している  
 土屋さんは、当初の苦勞か  
 ら、安心して暮らせるよ  
 うになるまで  
 の様子をつづ  
 った。「医者  
 や看護婦、友  
 人など、本  
 人が大勢の  
 支えられて  
 います。これ  
 らみんな  
 楽しんで、頑  
 張っていき  
 たい」と話  
 していた。



2001年3月3日(土) 愛知県版

2000年9月15日(金) 衛星版(ヨーロッパ)

2000年9月15日(金) 衛星版(アメリカ)

2000年10月23日(月) ぴーぶる首都圏

2000年10月8日(金) 募集広告  
 2000年10月21日(土)  
 2000年11月10日(金)

2000年12月8日(金) NEWSらんど

2000年11月19日(日) 募集広告

**及川さんを表彰**  
 「心に残る医療」  
 体験記コンクール  
 医療にまつわる思い出を  
 つづけた第19回「心に残  
 る医療」私の体験記コンク  
 ール(読売新聞社、日本医  
 師会主催、厚生労働省後援、  
 アメリカンファミリー生命  
 保険会社協賛、暮しの手帖  
 社協力の表彰式が2日、  
 東京・帝國ホテルで行われ  
 た。本県からは「家族  
 の時間」で読売新聞社賞に  
 輝いた会社員及川しのぶさ  
 ん(23歳)が出席、賞状と副  
 賞を受けた。  
 及川さんは、「これも主  
 人がくれたのだと思ってい  
 ます。この経験を何かに生  
 かしていけると、考えて  
 いるところです」と話して  
 いた。

2001年3月3日(土) 岩手県版

**医療体験記の表彰式**  
 医療にまつわる思い出を  
 つづけた第19回「心に残  
 る医療」私の体験記コンク  
 ール(読売新聞社、日本医  
 師会主催、厚生労働省後援、  
 アメリカンファミリー生命  
 保険会社協賛、暮しの手帖  
 社協力の表彰式が2日、  
 東京・帝國ホテルで行われ  
 た。県からは「折りの時を  
 共に過ごして」で日本医師  
 会賞に輝いた神戸市須磨区  
 横尾、主婦長尾直子さん  
 (41歳)らが出席、賞状と副  
 賞を受けた。

2001年3月3日(土) 兵庫県版





2001年3月1日(木)千葉県版



2001年2月16日(金)神奈川県版



2001年2月16日(金)北海道版



2001年2月16日(金)兵庫県版



2001年2月16日(金)全国第二社会面



2001年2月17日(土)新潟県版



2001年2月16日(金)東京都民版



2001年2月16日(金)多摩版



2001年2月16日(金)岩手県版



2001年2月24日(土)岡山県版



2001年2月16日(金)徳島県版



2001年2月16日(金)滋賀県版



2001年2月16日(金)愛知県版

忘れない、忘れたくない医療があります。

 <p><b>医師</b> 大阪府立中央病院 心臓血管科 加藤 寛紀</p>	 <p><b>医師</b> 大阪府立中央病院 心臓血管科 谷 直人</p>	 <p><b>医師</b> 大阪府立中央病院 心臓血管科 白石 史郎</p>
		
		
		

**AFLAC**

20世紀に、アメリカンファミリーのがん保険にご契約いただいた皆さま、副安(特約パック)で、そのまま「21世紀型」のがん保険にパワーアップできます。



—第19回—

# 心に残る医療

私の医療記コンクール  
入賞者作品発表

この医療記コンクールも、今年がすでに第19回を迎え、今年も多くの医療記が寄せられました。いざ読んだら、感動の連続、涙の連続、そして心に残る医療記が、数多く見られました。読者の皆さん、ぜひ読んでみてください。そして、心に残る医療記を探してみてください。

今年の入賞者は、以下の通りです。

 <p><b>入賞者</b> 大阪府立中央病院 心臓血管科 中野 直子</p>	 <p><b>入賞者</b> 大阪府立中央病院 心臓血管科 中野 直樹</p>
	
	

比べてみてください!  
アメリカンファミリーは、No.1の自信があります。

<p><b>がん保険</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「すべてのがん」と「上肢内臓がん」を一生保障。</li> <li>がんが原因で入院した場合は、入院給付金が支払われます。</li> <li>手術給付金は、手術費の100%を保障。</li> <li>がん診断給付金は、がんが診断された時点で、100万円を保障。</li> </ul>	<p><b>特約PACK</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>がん診断給付金 No.1</li> <li>入院給付金 No.1</li> <li>手術給付金 No.1</li> <li>がん診断給付金 No.1</li> </ul>	<p>比べてみてください! アメリカンファミリーは、No.1の自信があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>がん診断給付金 No.1</li> <li>入院給付金 No.1</li> <li>手術給付金 No.1</li> <li>がん診断給付金 No.1</li> </ul>
--	---	--

**0120-555-316**

アメリカンファミリー生命保険会社

第19回「心に残る医療」  
私の体験記コンクール経過報告

日本医師会常任理事 山田統正



経過をご報告申し上げます。「心に残る医療」私の体験記コンクールは、昨年の9月中旬に読売新聞に社告をもって募集を開始いたしました。十二月十八日に締め切りました。

その結果、今回は二、二五八編という多数の応募がございました。そのうち、医療をテーマとしたものが一、六八七編、介護が五七一編、また、海外応募作品も十五編を数えました。特に、介護部門がその数を増し、高齢社会における人々の関心の高さが窺えます。

審査は、第一次審査を本年一月九日から十二日まで読売新聞本社で、従来と同様に元読売ブッククラブのリーダー等の方々により行い、その中から一五〇編が選考されました。

続きまして、第二次審査を一月十三、十四の両日にわたり、山の上ホテルで、日本医師会の広報委員九名によって、ここからさらに三十編が選ばれました。

最終審査は一月三十一日、読売新聞本社におきまして、審査委員として日本精神病院協会名誉会長の齋藤茂太先生、医事評論家の水野肇先生、評論家の上坂冬子先生、厚生労働省医政局長の伊藤雅治様、アメリカンファミリー生命保険会社社長の竹美喜様、読売新聞社執行役員事業局長の矢後勝洋様、それに私に加わりまして、以上七名で慎重に審議させていただきました。

その結果、ご案内のように、厚生労働大臣賞、日本医師会賞、読売新聞社賞、アメリカンファミリー介護賞、特別賞、並びに佳作十点が決定し、二月十六日付の読売新聞紙上に発表されました。

ここに、発表に至るまでの各審査の概要をご報告し、本日受賞されました皆様にお祝い申し上げますとともに、「ご投稿下さいました読者の皆様、さらに、このコンクールにつきましてご支援賜りました多数の方々」に感謝を申し上げます。経過報告といたします。

ありがとうございました。

コンクール経過

- 平成12年
  - 9月14日 募集開始
  - 12月18日 (読売新聞全国第二社会面社告掲載) 募集締め切り
- 平成13年
  - 1月9日、12日 第1次審査(於・読売新聞社)
  - 1月13日、14日 第2次審査(於・山の上ホテル)
  - 1月31日 最終審査(於・読売新聞社)
  - 2月16日 入賞者発表
  - 3月2日 (読売新聞全国第二社会面社告 各都道府県版掲載) 表彰式、記念パーティー (於・帝国ホテル)

最終審査委員

- 日本精神病院協会名誉会長 齋藤 茂太
- 医事評論家 水野 肇
- 評論家 上坂 冬子
- 厚生労働省医政局長 伊藤 雅治
- 日本医師会常任理事 山田 統正
- アメリカンファミリー生命保険会社社長 大竹 美喜
- 読売新聞社執行役員事業局長 矢後 勝洋

審査委員名簿

- 第一次審査委員 (順不同)
- 遠藤 康次 小村 平安子 佐藤 優
  - 渋谷 芳夫 船木 誠 土肥 育子
  - 君島 廣子 荒井 文也 小口 朋子
  - 山口 菊江 金子 久子 岩崎 紗矢香
  - 鈴木 貫一 針谷 喜八郎 高野 涼子
  - 斉藤 与里子 堤 伸和 由井 礼子
  - 針谷 文子 深澤 美佳 伊達 ゆかり
  - 福田 ツヤ子 菅原 明子
  - 須藤 多恵子 菅原 和子
- 第二次審査委員 (順不同)
- 西 信博 榎殿 敦
  - 矢島 暎夫 八田 喜弘
  - 遠藤 幸男 伊藤 新次朗
  - 大坂 國通 隈部 時雄
  - 徳永 五輪雄

作品募集の主な応募規定

医療従事者との心温まる交流や介護にまつわる様々な体験など、患者や家族の心に刻まれた感動的な体験記を募集します。

四百字詰め原稿用紙五枚(二千字)以内。ワープロ可。

未発表作品に限ります。

作品に表紙をつけ、題名、住所、氏名、年齢、性別、職業、電話番号(FaxがあればFax番号も)を明記。介護部門には「介護部門」と付記。

医師とその家族は応募できませんが、その他の制限はありません。

版權は主催者に帰属し、応募作品は返却しません。

上位五賞(厚生労働大臣賞、日本医師会賞、読売新聞社賞、アメリカンファミリー介護賞、特別賞)各一点(賞状、楯および賞金五十万円)、佳作十名(同十万円)を選び、表彰します。

平成十三年度の詳しい募集要項は、九月ごろ読売新聞に掲載する予定です。みなさまの貴重な体験記をお待ちしております。

第19回「心に残る医療」私の体験記コンクール応募数

応募数内訳

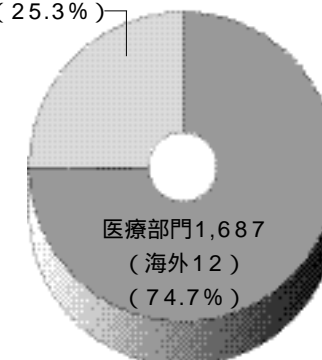
都道府県別

都道府県	応募数	都道府県	応募数	都道府県	応募数	都道府県	応募数	
北海道	58	東京	351	滋賀	17	香川	10	
青森	16	神奈川	205	京都	33	愛媛	18	
岩手	29	山梨	12	大阪	168	高知	6	
宮城	17	長野	22	兵庫	123	福岡	92	
秋田	14	新潟	21	奈良	21	佐賀	12	
山形	14	富山	17	和歌山	17	長崎	12	
福島	48	石川	14	鳥取	5	熊本	19	
茨城	69	福井	10	島根	12	大分	11	
栃木	81	岐阜	27	岡山	29	宮崎	10	
群馬	57	静岡	39	広島	32	鹿児島	12	
埼玉	188	愛知	62	山口	23	沖縄	1	
千葉	153	三重	28	徳島	8	海外	15	
							合計	2,258

応募作品

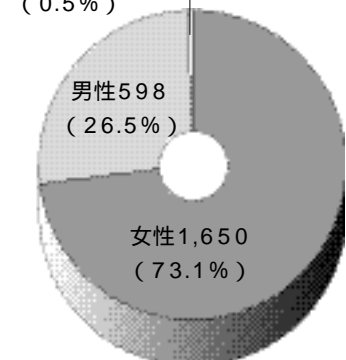
部門別応募数 ( )内は海外

介護部門571 (海外3)  
(25.3%)



男女別応募数

不明10  
(0.5%)



年齢別応募数

20歳未満	87	60~69歳	285
20~29歳	278	70~79歳	177
30~39歳	549	80歳以上	28
40~49歳	417	不明	76
50~59歳	361	合計	2,258

読売新聞は、皆さんが医療や介護の現場で体験された、  
心のふれあいをつづった作品を募集しています。

第19回「心に残る医療」  
私の体験記コンクール 入選作品集

2001年4月発行

編集 読売新聞社事業局事業開発部

発行所 読売新聞社

本社 〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1

事業開発部 〒135-8438 東京都江東区清澄1-2-1

電話：03(5245)7093

FAX：03(5245)7690

e-mail：jkai@yominet.ne.jp

ホームページ：http://www.yomiuri.co.jp/event/